

「わがまち 懐かしの風景」展

「まちの美術家」として、詩情豊かな水彩風景画を描いてきた内藤修次氏の多くの作品は、古き良き時代の富士宮市の記憶にある風景です。懐かしい里山や水辺の風景、そして町並みや社寺・学校などを描いた作品からは、人々の声・街の音・匂いといった心の風景が鮮やかによみがえってきます。

内藤氏は、日本近代洋画の確立期に独自の画風で一時代を築き、富士宮市泉町を終のすみかとした曾宮一念との親交を通じ、師の絵に親しみ、数多くのスケッチ旅行に同行するなどの経験を重ねて、創作への情熱を肌で感じて、独自の創作世界をひろげてきました。

今回の展示では、「富士宮の懐かしい風景」を歴史資料として見ていただくよう企画致しました。戦後まもない時代から現在までの約70年間に及ぶ内藤氏の作品を紹介します。



54. 浅間神社楼門

— 内藤修次 年譜 —

- 昭和5年(1930) 大宮町西町(現富士宮市西町)に生まれる。
- 昭和12年(1937) 大宮町立貴船国民学校入学。
小学生時代を通じ書道教室に通い、山田愛山ら5人の書家に学ぶ。
- 昭和19年(1944) 富士宮商工学校入学。
- 昭和22年(1947) 富士地方中等学校文化連盟主催第一回美術展覧会で出品作「浅間神社本殿」が図画特賞受賞。
この作品が同展覧会の審査員だった曾宮一念の目に留まり、同氏のアトリエを訪ねるようになる。
- 昭和23年(1948) 曾宮一念からスケッチと表現力の高さを評価され、美術学校進学を薦められるが、家業である衣料店を継ぐ決心をする。
- 昭和24年(1949) 富士宮商工学校卒業と同時に学生服の店「ワタヤ」入店。
- 昭和25年(1950) 曾宮一念の門下生で構成する絵画グループ「彩友会」発足とともに入会。富士宮市内在住の多くの芸術作家と交流する。
- 昭和30年(1955) 胸部疾患により手術入院。療養中、芸術作家など多くの仲間から見舞・激励を受ける。
- 昭和49年(1974) 彩友会を母体にした「富士宮美術協会」発足とともに入会。
- 昭和56～63年 (1981～1988) 「富士宮の懐かしい風景」に淡彩の絵筆を走らせて描いたスケッチが富士宮郵便局製作のオリジナル地域版絵葉書「富士山周辺の聚落」の原画に用いられる。
- 昭和63年(1988) 静岡県立富士宮北高等学校50周年記念誌の中表紙に水彩画「富士宮北高並木道 黄金の銀杏並木」が用いられる。
- 平成9年(1997) 富士宮第三中学校50周年記念誌『白尾』に学区内寸描として4枚の水彩画が用いられる。
- 平成16年(2004) 富士宮市役所市民ホール・富士宮市立西公民館で「懐かしのわがまち・富士宮百景水彩画個展」開催。
- 平成18年(2006) ねんりんピック俳句交流大会 in 富士宮の開催に協賛し、昭和30年代に描いた水彩画作品を原画とした「塗り絵」約50種類を高齢者の脳トレーニング用に製作する。
- 平成22～24年 (2010～2012) 富士宮美術協会会長。
- 平成24年(2012) 富士山環境交流プラザで特別企画展「写真と絵で見るわがまち・セピア色の記憶」開催。

—内藤修次作品 70 選—



1. 茅葺屋根の民家
1948年 大中里



2. 茅葺屋根の農家
1948年 大中里



3. 泉の民家
1948年 泉



4. 冬の村
1948年 大中里



5. 天子ヶ岳遠望
1948年 宮北町



6. 羽衣町の鑄造所
1948年 羽衣町



7. 収穫の秋
1949年 白尾山



8. 大中里風景
1949年 大中里



9. 黄金の秋
1952年 白尾山



10. 谷外の麦秋
1952年 沼久保



11. 大中里中村
1955年 大中里



12. 愛鷹山遠望
1955年 大中里



13. 大中里坂下
1956年 大中里



14. 大中里狐坂
1956年 大中里



15. 白尾台より
1956年 白尾山



16. 秋の中村
1957年 大中里



17. 明星山と富士川
1957年 星山



18. 収穫の秋
1957年 大中里



19. 菜の花畑と農家
1957年 大中里



20. 樹間の富士
1957年 白尾山



21. 駿河湾の遠望
1957年 白尾山



22. 毛無山遠望
1957年 西小付近



23. 森永富士工場
1957年 大中里



24. 大中里下風景
1965年 大中里



25. 星山の富士山
1957年 星山



26. 滝戸風景
1947年 野中



27. 滝戸溪谷
1947年 野中



28. 滝戸橋
1948年 野中



29. 湧玉池と写真館
1948年 宮町



30. 富士川と岩礁
1948年 沼久保



31. 芝富橋と鉄橋
1948年 長貫



32. 古びた水車小屋
1948年 大中里



33. 松林と潤井川
1950年 淀師



34. 田貫湖の早春
1956年 田貫湖



35. よしま池と水車小屋
1948年 大中里



36. 潤井川沖の河原
1956年 野中



37. 滝戸堤のれんげ田
田



38. 水と緑のよしま池



39. 神田橋風景
1957年 宮町



40. 湧玉池と神幸橋
1959年 宮町



41. 湖と愛鷹山
1963年 田貫湖



42. 田貫湖の富士
1994年 田貫湖



43. 田貫湖暮色
1995年 田貫湖



44. 城山風景
1947年 元城町



45. 御手洗橋
1948年 元城町



46. 松山町
1948年 西町



47. 西町大通り
1948年 西町



48. 大宮図書館
1952年 元城町



49. 専売公社跡地
1956年 宮町



50. 西富士宮駅
1986年 西町



51. 浅間大社楼門と玉垣



52. 池端と浅間大社回廊



53. 浅間大社楼門
1971年 宮町



54. 城山よりの浅間大社
1972年 宮町



55. 玉宝寺と弓沢堀
1972年 光町



56. 山寺(要行寺)
1949年 淀平町



57. 大頂寺の鐘楼
1956年 東町



58. 大泉寺参道
1956年 野中



59. 村山大日堂
1957年 村山



60. 秋の先照寺
1958年 大中里



61. 黒田本光寺
1957年 黒田



62. 富士桜霊園
1974年 上井出



63. 大宮商工の大樹
1947年 宮北町



64. 大宮商工運動場
1947年 宮北町



65. 大宮商工武徳殿
1948年 宮北町



66. 大宮商工校舎
1948年 宮北町



67. 北高並木道・春
1976年 宮北町



68. 北高並木道・夏
1987年 宮北町



69. 北高並木道・秋
1992年 宮北町



70. 旧麓分校
1970年 麓

《展示目録》

※ () 内は「内藤修次作品70選」(前掲)の番号。(他)はその他の内藤氏の作品。

| No. | 資料名 | 制作年 | 所蔵者 | No. | 資料名 | 制作年 | 所蔵者 |
|-----|---------------|------|---------|-----|-----------------------|------|-----------|
| 1 | 水揚げ水車 | — | 市立郷土資料館 | 31 | 旧麓分校(70) | 1970 | 内藤修次 |
| 2 | 茅葺屋根の民家(1) | 1948 | 内藤修次 | 32 | 『富士宮北高50周年記念誌』 | 1987 | 市立中央図書館 |
| 3 | 泉の民家(3) | 1948 | 〃 | 33 | 『白尾一富士宮第三中学校50周年記念誌一』 | 1997 | 〃 |
| 4 | 天子ヶ岳遠望(5) | 1948 | 〃 | 34 | 内藤修次と仲間たち(交友写真) | — | 内藤修次 |
| 5 | 黄金の秋(9) | 1952 | 〃 | 35 | 記念写真 | 1956 | 〃 |
| 6 | 谷外の麦秋(10) | 1952 | 〃 | 36 | 『画家は廃業』 | 1992 | 市立中央図書館 |
| 7 | 菜の花畑と農家(19) | 1957 | 〃 | 37 | 平癒祈願寄書き | 1955 | 内藤修次 |
| 8 | 毛無山遠望(22) | 1957 | 〃 | 38 | 曾宮一念書簡 | 1966 | 〃 |
| 9 | 森永富士工場(23) | 1957 | 〃 | 39 | 星山の富士山(25) | 1957 | 〃 |
| 10 | 滝戸橋(28) | 1948 | 〃 | 40 | 田貫湖暮色(43) | 1995 | 〃 |
| 11 | 湧玉池と写真館(29) | 1948 | 〃 | 41 | 塗り絵(星山の富士山) | 2006 | 吉澤利一 |
| 12 | 松林と潤井川(33) | 1950 | 〃 | 42 | 塗り絵(田貫湖暮色) | 2006 | 〃 |
| 13 | よしま池と水車小屋(35) | 1948 | 〃 | 43 | 塗り絵(よしま池と水車小屋) | 2006 | 〃 |
| 14 | 神田橋風景(39) | 1957 | 〃 | 44 | 地域版絵葉書 | 1981 | 内藤修次 |
| 15 | 湧玉池と御幸橋(40) | 1959 | 〃 | | | 1988 | |
| 16 | 城山風景(44) | 1947 | 〃 | 45 | 水と緑のよしま池(38) | 1957 | 〃 |
| 17 | 御手洗橋(45) | 1948 | 〃 | 46 | 潤井川沖の河原(36) | 1956 | 〃 |
| 18 | 専売公社跡地(49) | 1956 | 〃 | 47 | 富士川と岩礁(30) | 1948 | 〃 |
| 19 | 西富士宮駅(50) | 1986 | 〃 | 48 | 明星山と富士川(17) | 1957 | 〃 |
| 20 | 山寺(要行寺)(56) | 1949 | 〃 | 49 | 芝富橋と鉄橋(31) | 1948 | 〃 |
| 21 | 大頂寺の鐘楼(57) | 1956 | 〃 | 50 | 村山大日堂(59) | 1957 | 〃 |
| 22 | 大泉寺参道(58) | 1956 | 〃 | 51 | 秋の白糸の滝(他) | 1955 | 〃 |
| 23 | 黒田本光寺(61) | 1957 | 〃 | 52 | 裾野と愛鷹 | 1964 | 富士宮市 |
| 24 | 浅間神社本殿(他) | 1947 | 〃 | 53 | 大洋の如く前途遠大 | 1959 | 内藤修次 |
| 25 | 賞状 | 1957 | 〃 | 54 | 駿河湾の遠望 | 1957 | 〃 |
| 26 | 曾宮一念写真 | — | 〃 | 55 | 毛無山寒雷之図 | 1966 | 富士山本宮浅間大社 |
| 27 | 北高並木道・春(67) | 1976 | 〃 | 56 | あかつきの愛鷹 | 1966 | 〃 |
| 28 | 北高並木道・夏(68) | 1987 | 〃 | 57 | 富士絵馬趣意書 | 1965 | 内藤修次 |
| 29 | 北高並木道・秋(69) | 1986 | 〃 | 58 | 内藤氏自画像 | 1957 | 〃 |
| 30 | 北高並木道・秋(他) | 1992 | 〃 | 59 | 内藤美少年像 | 1953 | 〃 |

「わがまち 懐かしの風景」展

期 間：平成28年12月3日～平成29年2月26日

場 所：富士宮市立郷土資料館（富士宮市宮町14-2）

問合せ先：富士宮市教育委員会 文化課（埋蔵文化財センター）

TEL)0544-65-5151 FAX)0544-65-2933

「食の民具」展

民具とは、人々が生活していく中で作られ、使用されてきた、さまざまな用具のことです。使用目的によって、生活に関するもの、農業などの仕事に関するもの、婚礼や葬送などの村での社会生活に関することなどに分けられます。本展では、私たちの生活に直結する「食」に関する民具を通して、いろいろな場面での食について、紹介します。

1 日常の食事の道具

調味料の道具

味噌や醤油は、かつては各家庭で作っていた。醤油は、各家庭で大豆・小麦・豆麴・海水を混ぜた「もろみ」を仕込んだ。農閑期の秋から冬にかけて行った。一年ほど発酵させ、リアカーに醤油絞り機を乗せた職人に来てもらい、絞ってもらっていた。

炊事・調理の道具

毎日の食事の調理に使う民具には、羽釜(はがま)やせいろ、こね鉢、鯉節削りなどがある。現在も調理器具として使用されているものも多い。囲炉裏があったころは自在かぎを上から吊るし、鍋や鉄瓶を掛けて汁物などを温めていた。



囲炉裏(いろり)

食卓の民具

ちゃぶ台で食事する以前は、家族が同じ食卓を囲むのではなく、ひとりずつ箱膳(はこぜん)を使用していた。箱膳には一人分の食器が入っており、食事のときは蓋を裏返して飯台にした。食事が終わると茶碗にお湯を注ぎ、湯を飲んだあとに蓋をして納めた。現在のように食事の度に食器を洗うことはせず、月に数回洗う程度だった。



箱膳

農繁期の食事

農家の食事の回数は、現在と同じく朝・昼・晩の3回だったが、農繁期には、早朝の食事(チャノコ・オチャノコ)や午後の間食(ユージャ・オユージャ)が加わって一日に4~5回食事をとることもあった。昼は午前10時から11時、ユージャは午後2時から3時、夕飯は午後8時くらいだった。弁当にはめんばの身と蓋に飯をつめて、持っていった。



めんば

2 ハレの日の食—年中行事—

ハレとケ

「ハレとケ」とは、日本人の生活リズムを表した言葉で、「ハレ」の日は、年中行事や冠婚葬祭などの特別な日を指す。ハレの日にはご馳走を食べたり、家の中や外に特別な装飾をしたりする。これに対して、通常の日のことを「ケ」と呼ぶ。ケの日の中にハレの日があることで、人々の生活に変化が生まれる。

現在は生活様式が変化し、かつてはハレの日にはしか食べられなかったものでも普段から食べられるようになり、ハレとケの区別は曖昧になっている。しかし、特別な日に着るものを「晴れ着」と呼んだり、大切な場面のことを「晴れ舞台」などと言ったりすることから、「ハレとケ」の概念は人々の意識の中に根付いていることがわかる。

ハレの日の食事

ハレの日の代表的な食といえば、「餅」と「赤飯」があげられる。古くから米は貴重なもので、その米から作られた餅や赤飯は、特別なときにしか食べられないものだった。餅には特別な力が宿ると考えられ、正月に子供たちが楽しみにしている「お年玉」も、もともとは餅だったといわれる。赤飯は、誕生祝いや七五三などの祝いの行事に用いられ、市内ではオブッコ(オボッコ)と呼ばれる赤飯のおにぎりが、集落の祭礼や行事などで配られる。

富士宮の行事食

| 行事名 | 食べ物（お供えも含む） |
|--------------|--|
| 正月(1/1) | おせち料理、雑煮 |
| 七草(1/6・7) | 七草粥 |
| 小正月(1/14・15) | どんど焼きの団子・小豆粥 |
| 山の神(1/17) | オヒラ(ゴボウ・人参・こんにゃく・椎茸・昆布結び・れんこん・タケノコの煮物)、茶飯、味ご飯、赤飯 |
| 次郎朔日(2/1) | 雑煮、モチバナ |
| 節分(2/3) | 大豆、いわし |
| 初午 | オブッコ(赤飯おにぎり) |
| 彼岸 | ぼたもち |
| 桃の節句(4/3) | ひし餅、白酒、あられ |
| 端午の節句(5/5) | 柏餅 |
| 八朔(8/1) | 赤飯 |
| 盆(8/13～16) | そうめん、おにぎり、赤飯、おはぎなど |
| 彼岸 | おはぎ |
| 十五夜・十三夜 | 里芋・さつまいもなどの農作物(十五夜はそのまま、十三夜は煮物)、小麦饅頭、月見団子 |
| 冬至 | かぼちゃの煮物 |
| おひまち | オブッコ、赤飯 |
| 大晦日(12/31) | 年越しそば |



火伏念仏の鏡餅(白糸・内野)



カワカンジョウのオブッコ(下羽鯛)

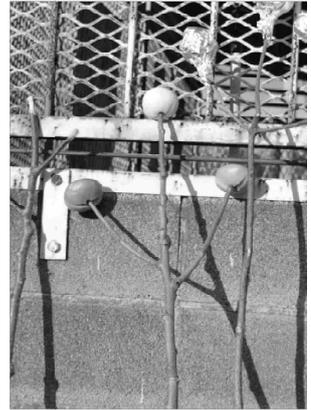
参考:『民俗調査報告書』(富士宮北高等学校郷土研究部、1972)、市内各区誌ほか

七草粥と小豆粥

七草粥は、春の七草(セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ)を、粥の中に入れて炊いたもので、七草に限らず、その時に手に入るもので作った。七草粥を1月7日の朝に食べると、無病息災で過ごせるといい、多くの家庭で行われてきた。小豆粥は、小正月(1月15日)に作る料理で、どんど焼きの燃え残りで煮た。神棚に供えたり、人間が食べたりするほか、柿の木などを叩き、よく実るように願う「成木責め(なりきぜめ)」にも使われた。小豆粥をかけ、「ダイノコ」というヌルデの木の棒で、叩いてまわったという。



七草をたたく



どんど焼きの団子

古文書に見る講と食事—恵比寿講—

恵比寿講は福の神である恵比寿をまつる行事で、主に正月20日と10月20日に行われた。

江戸時代末期に大宮町の役人を務めた佐野与市(角田桜岳)の日記には、人々の生活の様子が詳しく記され、安政7年(1860)正月20日の記事には、恵比寿講の記述がある。

日記によると、恵比寿講の日、商家では朝に赤飯や脛(なます)汁などを用意してお祝いをし、農家では夕方に蕎麦(そば)を用意したという。また、与市宅では、今まで朝夕ともに強飯(こわめし)・蕎麦を出していたのが、昨年(1859)から夕方の蕎麦のみになったことも記され、民俗行事の変化を伺うことができる。

なお、日記には、安政6年(1859)10月20日の恵比寿講についても記されている。

(翻刻)

同廿日薄曇、寒事甚シ、朝風アリ、夜半曇

例年休日、蛭子神講

一今日町方ニテ商人ノ分朝祝ヒトテ赤飯・

脛汁等ニテ人ヲモ招、又家内ニテモ祝フ事也

農家タエヒストテ大分ハ蕎麦也、尤十月ニ

引競テハ農商共祝ヒ方疎也、掛魚等ノ

事モ多分ハナシ、吾方一二年前迄ハ朝夕共

一同ハ強飯・蕎麦遣タルガ、昨年ヨリ夕方ノ蕎

麦ノミニシテ、朝小豆飯ノミ神ニ備エル也

(大意)

二十日(安政七年(一八六〇)正月)薄曇りでもとても寒い。朝は風が吹き、夜中は曇り。

例年休み、エビス講

一今日、町方で商家は「朝エビス」として、赤飯、脛

汁などを用意し、人を招き、家内でもお祝いをす

る。農家は「夕エビス」といい、大方は蕎麦である。

もつとも、十月と比べると、農家・商家ともに祝いは

方は簡素である。魚を供えることもほとんどない。

私の家では、一・二年前までは朝夕ともに一同へと

強飯・蕎麦を振舞ったが、去年から夕方の蕎麦のみ

にして、朝は小豆飯のみ、神様へと供える。

3 ハレの日の道具—婚礼—

婚礼の歴史

人の一生には、その節目によってさまざまな行事がある。中でも「結婚」は子供を産むことにもつながり、家の存続に関わる重要なことだった。

江戸時代より前は婚礼(結婚式)を嫁の家で行い、そのまま嫁の家で独立した場所を与えられて生活を始める、「婿入り婚」が主流だったと考えられている。一定期間嫁の家で過ごす、婿の家へ移ったという。これは女性の労働力が重要視されていたからだと考えられている。江戸時代になると、婚礼は婿方で行い、一定期間は嫁方で生活する、という「足入れ婚」も出てきて、次第に嫁入り婚が主流になっていったという。

現在では、生活環境の変化などにより、様々な婚礼の形がある。時代によって、結婚・出産に対する考え方も変化してきている。

婚礼の様子

婚礼は、現在は式場で行うことが一般的だが、昭和30年代くらいまでは、婿の家で行うことが主流だった。

かつてはほとんどが仲人(なこうど)を立てての見合いだった。見合い当日も嫁はお茶を出すだけで、婚礼当日にお互いの顔を見た、という話も多い。結納では結納金のほか、柳樽(やなぎだる)、鯉節、昆布、海老、するめ、トモシラガ(白の麻糸の束)などが渡された。婚礼の当日、嫁の自宅へ婿が出向き、婿と、嫁の両親・親戚の親子盃(さかずき)・兄弟盃が交わされた(「くれ祝言」)。その後、嫁を連れ、婿の家で婚礼が行われた。婚礼には親戚や隣組の人々が招待された。結婚は両家だけでなく、集落にとっても喜ばしいことだった。



自宅での婚礼(昭和36年/1961)



婚礼用の銚子

「食の民具」展

期 間：平成29年3月18日～平成29年6月25日

場 所：富士宮市立郷土資料館(富士宮市宮町14-2)

問合せ先：富士宮市教育委員会 文化課(埋蔵文化財センター)

TEL)0544-65-5151 FAX)0544-65-2933